OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	新出の新造学校観光院図について
Author(s)	梅溪, 昇
Citation	懐徳. 1982, 51, p. 33-39
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90601
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

新出の新造学校観光院図について

梅溪昇

中井竹山の『草茅危言』巻二の「学校の事」に、

往年高辻黄門公、京師に學校の廢絶したるを深く嘆かせられ、古代の規を摹し、菅家の學を設られたり、既に院の御所へ内奏を經させられ、時の關白九條殿下にも御聞濟あり、經費は加賀南部へ托せらるべく、もはや東旨を伺はせらるゝのみになりたり、これ容易ならざることなれども、萬一官許を得て建學に及びたらば、その規模制度はいかゞすべきとて、是又内々勘考あらせられ、愚拙は兼て懇遇を得るゆへ、或時召れて咨詢ありしまゝ、愚意一通り演說し、尚又退て畫一劄子を具へて、是を詳かにし、建學私議と名づけ、又鄙見を以て新たに圖式を裁し、并せてこれを獻ぜしに、甚だ悦ばせられ、内々殿下にも呈せられ、その後天覽をも經たりなど仄かに承たり、恐多き御事なり、されどもその比東關政府は、文事に遑落たる御事なりしかば、菅公より仰出さるべき端緒もなく、それなりになりしは嘆ずべきの甚しきなり、その後鄙撰の私議圖式など、尾藩の士大夫中に取傳へて、圖らずも尾公の御前へも出たるに、思召に叶ひて寫留をも仰付られしと聞及べり、是又恐入たる御事なり、それより程なく京師回祿にて、右等のことは一向灰滅塵斷したれども云々

とあって、堂上家の一つである高辻黄門、すなわち高辻胤長（高辻家は菅原道真六世の孫是綱を祖とす。胤長、本名は世長。元文五年（一七四〇）十一月廿七日生、安永四年（一七七五）四月十三日參議、安永八年（一七七九）五月四日権中納言（黄門）、寛政八年（一七九六）十二月廿四日権大納言、享和三年（一八〇三）三月廿八

日龍、六十四歳）から、復興を志した学校の規模設計を竹山が命ぜられ、これに応えて竹山が建学私議・図式を呈上した次第を知ることができる。

さて、建学私議は、天明二年壬寅七月の日付をもち、竹山国字牘(下)に上中納言菅公建学私議（建学私議画一劄子）として収められている。それには、建学の趣旨のほか、その校名を観光院と名づけ、なるべく御所の築地内に然る地面をとり、聖堂をも建立し、配享は十哲などの俗習を絶ってわが日本にての配享の法を定めるべきであり、学派は程朱を宗とすべきことを説いているが、また校内の各建物の名称を考え、その典拠を記し、かつ地面は六十間四方という胤長の計画予定のうえに総建物をその間数に合わせて配置を考え、「別ニ愚案ヲ以絵図一紙仕リ差上候」としている。

この絵図が先の図式、すなわち学校設計図に相当するが、これまでその存在は知られず、そこにどのような記載がなされているものか全く不明であった。

ところが、去る昭和五十五年夏、大阪市阿倍野区松虫二―八―二に在住される逆瀬桑次郎氏および令嗣允吉氏の秘蔵される懐徳堂関係資料のうちからこの絵図が新発見された。この間の経緯については故木村英一先生が「懐徳」第五十号「懐徳堂先賢の業績と遺品との蒐集・整理・保存に関する近況について」の中で触れられている通りであるが、そのさい同先生より本絵図の紹介を筆者に托されたので、今回ここに紹介に及んだ次第である。

調査当時、本絵図は二十五葉に断裂して袋に入っていたものであるが、（いつ、何故かかる断裂の状態となったかは判らない。）これらの断裂をつなぎ合わすと、方六十間の地所に配置された学校の設計図を完全に復元することができた。逆瀬家では桑次郎氏の父君忠次郎氏愛用の鞄の中にその袋が入っていたところから、忠次郎氏が入手されたと推定されている。忠次郎氏は慶応二年（一八六六）生れ、四国の出身で、日清戦争には近衛兵として従軍、戦後大阪に出て、明治末年ごろから新町で商業を営み、戦時中に八十歳でなくなられた。入手の時期はもとより詳かではないが、新町時代に大阪関係資料を収集された由であるから、おそらく、明治末年から大正にかけてのことであったであろう。

現在、逆瀬家では断裂をつなぎ合せて複元し、これを縦一一六糎、横一〇七糎の軸装とされて所蔵されている。その全容は、本誌巻頭の口絵写真（「新造学校観光

院図」）の通りである。

本図の左下には「天明二年壬寅孟秋　大阪中井積善私擬拝呈　門人古林尚柔謹謄」とあって、竹山が本図を高辻黄門に呈上した時期が建学私議と同じ天明二年（一七八二）七月（陰暦）であったことが判明する。なお、ここに竹山の学校設計図を「謹謄」した門人古林尚柔は、『続大阪人物誌』に出る古林（ふるばやし）謙斎のことである。同誌には中井竹山の記した古林君明壙誌（「奠陰集」）に拠り、「名は尚柔、字は君明、通称哲蔵、謙斎と号す。浪華の人古林橘庵の子なり、幼にして父を喪ひ叔父槐庵に憑りて鞠養せらる。資性剛にして通敏、学を好みて業を中井竹山の門に受け、尤も詩文を善くす。慨然四方に志あり、時に尾州名古屋藩の興学を聞き、乃ち笈を負ふて赴く。然れども志を得ず、病を謝して還る。再び竹山に従ふて学業益々進み、儒を以て他日の大成を期せられしも不幸病に罹りて歿す」とある。歿年は天明八年正月二十一日、行年二十八歳で、右の謄写は謙斎（尚柔）二十二歳のときに相当する。墓所は大阪市天王寺区高津中寺町の禅林寺にあり、同寺には古林家累代の墓が多数あって、その集合墓の中に、橘庵・槐庵の墓とともに「謙斎古林先生墓」が存在している。その後裔は現在西宮市北昭和町一一―二〇に在住の古林兆一氏であることを禅林寺住持よりうかがったので、近く同氏にお目にかかって種々御教示を乞う所存である。

竹山が高辻黄門に呈した図式は、すなわちこの「新造学校観光院図」そのものであり、門人古林尚柔が書いたものであったことは「謹謄」の文字からもうかがわれ、今回発見されたものは、竹山もしくは竹山周辺に保存されていた控であろう。

以下、本図についてやや詳しく説明しておこう。

まず学校の統名を観光院としたのは、易の観の卦の六四の爻辞の「観国之光利用賓于王」に拠ったものであ



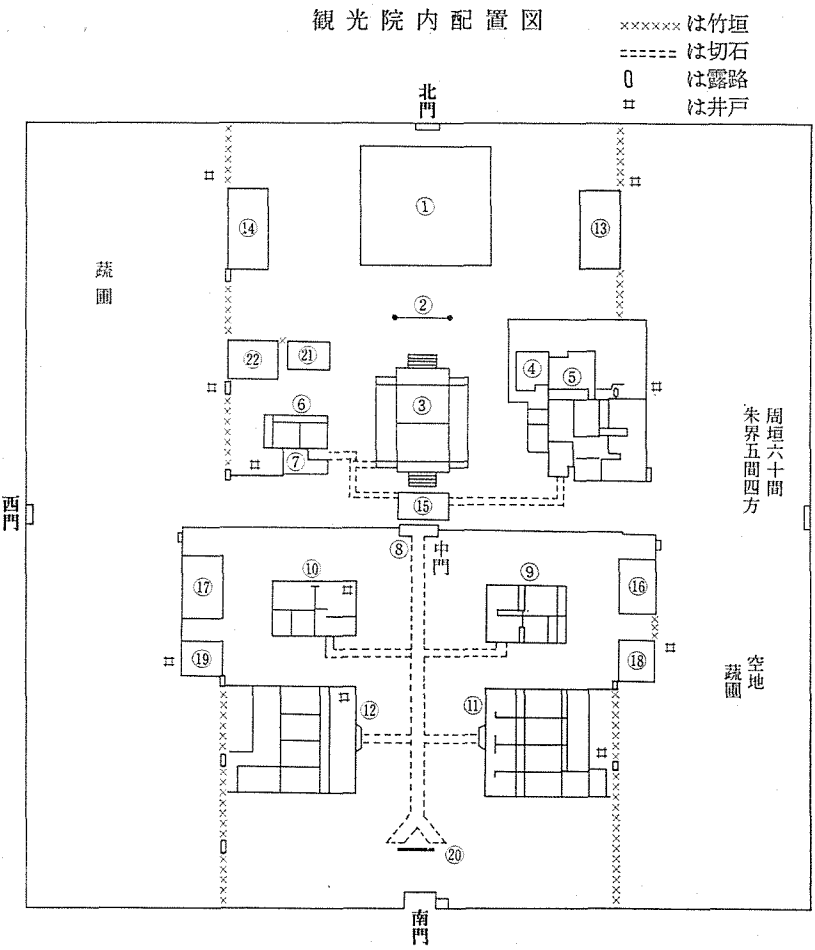
る。その校内各建物を図上に示すに当たり、経緯ともに十一の朱線を引き、朱界二寸五分（鯨尺）四方をもって実際の五間四方に相当させ、方六十間（三千六百坪）の敷地の設計縮図を作っている。その各建物その他の配置の概略は、次に示す「観光院内配置図」の通りで、①聖堂基址、②聖堂門址、③講堂、④就将閣、⑤時習軒、⑥尊賢斎、⑦授粲堂、⑧中門、⑨松局、⑩梅局、⑪遜志左塾、⑫時敏右塾、⑬経史庫、⑭子集庫、⑮敷瓦、⑯土蔵、⑰土蔵、⑱納屋、⑲納屋、⑳樹、㉑納屋、㉒庫である。

竹山は、すでに述べた通り建学私議の中でこれら学舎の称号選定について記し、かつ本図中に註記しているものもあるので、これらを併せて紹介しておく。

③講堂は明新堂と命名したが、これは大学の明徳新民に拠るもの、各二十四畳の二間に、東西に各一間半の廂（ひさし）（各十八畳）、南北に各一間の縁と階段を有している。

講堂の東側にある④就将閣は、周頌の日就月将学有緝熙于光明に拠り、尊貴の御休息所として、上の一間八畳は上壇の心持にて一段高くつくり、床・書棚に中連子があり、外の生垣に対する。次の一間十八畳が平日尊貴の御会集の場所としての⑤時習軒で、論語の首章に拠ったもの。時習軒の間の南には、縁つづきに十二畳・十畳の二間がある。その十二畳の間の南側は八畳の玄関の間となり式台がある。十畳の間の南側は八畳の茶所、さらにその南側は六畳の内玄関で南に入口がある。

講堂の西側には、教授の居間として⑥尊賢斎十畳の間があり、床・書棚をそなえ、西側は縁である。尊賢斎の号は中庸・孟子に拠ったもの。その十畳の東側は八畳の玄関の間で南側に式台がある。尊賢斎の間の南側に壁・襖をへだてて八畳の食事茶所などに用いる部屋があり、西に入口がある。これを⑦授粲堂と名付けている。これは詩の緇衣の篇の予授子之粲に拠ったもので、礼記に好賢如緇衣と見えるので的当であろうと自負している。この八畳の授粲堂の東側に三畳の供部屋があって東北の角に入口がある。⑧中門は進修門で、易の文言伝の君子進徳修業に拠ったもの。この門の左右に門聯ありたく、その文字は追て選定するとしている。中門の南左右に御役所二か所を置き、左を⑨松局と称して東半分に床・押入付の十二畳の間、その南側に各六畳の茶所・玄関の二間がつづいている。西半分は庭で、竹縁・竹垣で庭を南北に二分し、北の庭には大松一両株、南の庭には若松四、五本を植える。この松局は、尊貴御入来の時の送迎、茶



蔫火盧などの沙汰、御講習の節の坐席の陳設、時刻の懸引、塾生の聚散・進退の指揮、御文庫書籍の出納、門戸の管籥、臨時賓客の応対などすべて表向の事を掌るところである。これに対して右を⑩梅局と称し部屋の配置は松局と同じであるが、東半分の庭のうち北庭には紅梅一両株、南庭には白梅四、五株を植える。この両局は菅原氏の流れをくむ高辻家にちなんで名付けたとしており、両局の前除に松・梅の二木を植えて景致とすればなお宜しかろうという。

これら両局の南に左右に分かれて学寮の建物が置かれ、学寮の総名は尚書に拠って東を遜志、西を時敏とし、おのおのその正面の壁上の外に向けて遜志左塾・時敏右塾と門扁を掲げる。これは惟学遜志務時敏厥修乃来と兌命に見える文に拠ったもの。さて⑪遜志左塾は東に向って門を入ると庭があり、北から南へ順に書棚・押入付各十二畳の春誦舎・夏絃舎・秋礼舎・冬書舎がならび、襖で仕切られている。四舎の東側は裏口・浴室・会食場（八畳）・台所（土間とも十二畳）につづき、井戸がある。以上四舎の名はいずれも礼記の王制に拠ったものである。西の⑫時敏右塾も間取りは遜志左塾と同様であるが、学舎名は北から南へ順に蔵焉舎・修焉舎・息焉舎・游焉舎となっていて、同じく学記に拠ったものである。

さて⑬経史庫はいうまでもなく経・史の書庫であるが、火災のとき⑤時習軒の物品をこの庫中に収めると図中に註記している。なお本庫の近く、北に伸びる竹垣の外側に井戸（はねつるべ）の設けがある。⑭子集庫は子・集の書庫であるが、これまた火災のときは聖堂講堂の物をこの庫中に収めるとある。井戸も同様の位置にある。⑯土蔵は、火災のとき松局ならびに左塾の物をこの庫中に収める。⑰土蔵も同様で火災のときは梅局の物および右塾の物を収める。⑱納屋は、松局ならびに左塾の雑具・米・薪等を平日収納。⑲納屋もそれに準ずるものである。㉑納屋は、講堂をはじめすべて中門以内の諸物・雑具・また時節により当用のない品を収める。㉒庫は、火災のとき講堂の物、子集庫に収めた以外の残物・雑具および尊賢斎中の物を収める。⑳樹は、外門（南門）を入った正面にある植え込みで、そこを回って切石道を進み、左右の学寮および松梅両局に入るか、もしくは直進して中門を入り、⑮敷瓦のところに達し、そこよりまた石切道を通り講堂または左して尊賢斎・授餐堂、右して就将閣・時習軒に達するようになっていた。外門の門扁には観光院と掲げるとされ、竹山みずから筆を執るつもりであったろう。なお敷地内の空地には、蔬園が予定されている。また竹垣の処々には露路があり、出入りの便がはかってあり、井戸も各所に設けられている。

以上で本図の内容紹介をほぼ尽した。

すでに述べたように、竹山の建学私議および本図は京都の大火などで実現をみず徒労に帰したが、竹山はその後もこの学校の実現に熱情をもち続け、『草茅危言』にこれを再議して、皇居造営の序に、場所を御築地内の東

南隅に相し、その正門は丸太町に面した六十間四方の一区を画して学校を建て、親王家を別当として、親王諸王並に摂家大臣家始め華族の子弟を就学せしむべしと極力勧めるほか、その運営についても詳細な建策を行なった。しかしこれも亦遂に実現をみなかったことは、竹山にとって蓋し一大痛恨事であったであろう。西村天囚はその著『懐徳堂考』において、この事に触れて、「当時の建学私議は、遂に行ふを果さゞりしも、維新後の学習院設立は、実に此の議に淵源せりといふ」と記し、これは高辻修長子の物語によるものであるとしている。

擱筆にあたり附言させて頂く。筆者は故木村英一先生とたまたま大阪大学赴任前の勤務場所を同じくしていたためか、赴任後もとくに御昵懇にして頂き、懐徳堂文庫のことなどについて御高教を受けることが屢々であった。木村先生の命によって日本経済新聞の文庫めぐりに懐徳堂文庫の簡単な紹介文を書いたのは、昭和三十五年八月のことであり、その後中国哲学・国文学両研究室はじめ文学部事務室関係者の御努力の結果でき上った『懐徳堂文庫図書目録』（昭和五十一年刊）の序を職務上書くことになったが、いずれも、先生から文庫のくわしい来歴をお聞きして始めて書き上げることができた。近年は失礼しているが、懐徳堂堂友会の見学旅行にはいつも先生御夫妻の姿があった。またミシガン大学日本研究所にいたころ、先生が来られて、そのアジア図書館で先生御編著の『肇論の研究』を取り出してきた館長が是非にと署名を求め、先生が辞退しきれずに丁寧に署名されたことも思い出の一つである。先生の晩年におけるおそらく最後の懐徳堂資料の採訪となった、逆瀬家の調査に堂友会員中島安之助氏とともにお供させて頂き、暑さの中謹直な態度で一点一点資料を披閲され、いずれも貴重な収穫であったことを殊のほか喜ばれた先生のあのときの御姿が今も彷彿とする。

茲に、長年にわたる懐徳堂文庫の保存・充実、および懐徳堂事業の運営についての先生の限りない御熱情と多大の御功績を偲び、心から御冥福をお祈りする次第である。

（昭和五十七年九月二十七日記）